

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 2 日現在

機関番号：15501

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2015

課題番号：25580176

研究課題名(和文)近代日本における工業労働者への食料供給と植民地経営をめぐる地理学的研究

研究課題名(英文)Geographical study of the food supply for industrial labour and the colonial policy of Modern Japan

研究代表者

荒木 一視 (ARAKI, Hitoshi)

山口大学・教育学部・教授

研究者番号：80254663

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：近代日本の工業化を支えた労働者への食料供給はどのようにして実現されたのかという観点から、戦前の日本の植民地を含めた海外との食料貿易を検討した。台湾、朝鮮半島、中国大陸、東南アジアなどとの間で、相当量の食料貿易が展開され、穀物をはじめとした食料を海外に依存するとともに、海外からの食料資源の調達に大きな関心が払われていたことが明らかになった。それは、多くの食料を海外に依存する今日の状況を考える上でも示唆に富む。

研究成果の概要(英文)：Japan's food trade in the prewar time was investigated in terms of how the food supply system for industrial labor was established in modern Japan. It revealed that a considerable amount of foods had been imported from Taiwan, Korea, China and Southeastern Asia and that Japan's food dependence of foreign source was high at that time. In parallel, Japan in this period gave particular attention to secure the food resources. It is quite thought-provoking to discuss contemporary Japan's food supply that is heavily dependent on foreign foods.

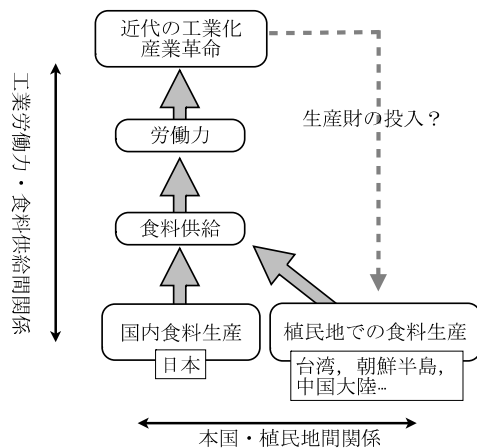
研究分野：人文地理学

キーワード：食料供給 近代 植民地 フードレジーム論

1. 研究開始当初の背景

本研究の着想の背景にはフードレジーム論がある。同論は英語圏の食料研究者によって提唱されたもので、国境を越えたスケールで構築、再構築を繰り返す食料の供給体系をフードレジームとして把握する。とくに第一次レジームの議論では、新大陸・植民地からの安価な食料供給がヨーロッパの産業革命を支えた。すなわち 20 世紀初頭までの大量の小麦のヨーロッパ向け輸出が、ヨーロッパの工業労働者の食料需要を賄ったという観点が示されている。同論のような産業革命を支えた工業労働者への食料供給という視点から、わが国の植民地経営や「近代」を読み解こうとする立場が従来的に存在していたわけではない。しかし、極めて興味深い試みであると考えた。

特に近代日本にとって、産業革命・工業化を推し進めることは基幹となる政策で、それを支える工業労働力の確保も重要な問題であった。しかしながら、いかにしてこれら労働者への食料供給を実現するのかという側面から日本の工業化をとらえようとした研究はみられない。この点に関わるアプローチが必要と考えた。そこで、フードレジーム論を援用しつつ、明治から昭和初期に至る日本の工業化とそれを支えた食料供給体系を、わが国とその植民地の拡大との関係から把握することを目指した。以上を模式化したのが下図である。



2. 研究の目的

明治から昭和初期にかけての工業化の進展を、工業労働者に対する安価な食料の供給体系の構築という側面からとらえ、食料供給体系の安定的な運用をアジアでの植民地の拡大という文脈と関連させて読み解くことを目指した。すなわち、当時の日本が労働者の食料需要を支えるための安価な食料の安定的な供給システムの構築を目指し、どのような植民地経営を展開したのかを、地理学的な観点から解明することを目的とする。

具体的には、明治から昭和初期にかけて日本が東アジアとの間に形成した食料供給体系の地理的パターンを描き出すことであり、

日本とその植民地を中心とした東アジア諸国・地域(台湾, 朝鮮半島, 中国大陸等)を個別的分析対象とした。

この取り組みの学術的特色として以下の2点を挙げる。1つは工業労働者への食料供給という側面から近代の工業化を検討する点、2つはそれを植民地経営や植民地の拡大との関連から把握する点である。こうした観点を地域間の関係を検討してきた地理学の立場から、地理的なパターンとして描き出せれば、歴史地理学のみならず、広く近代史研究においても貢献しうるものと考えた。さらに、戦前のわが国の食料供給体系を海外との関係から描き出すことができれば、海外に多くの食料を依存する今日のわが国の食料や農業の問題に対しても有効な視座を提供できると考えた。

3. 研究の方法

基本的に文献や統計類の読み取りとその分析が研究の中心である。主に典拠としたのは山口大学東亜経済研究所に所蔵されている明治から昭和初期にかけての資料である。これらを利用し、第一に米を中心とした食料生産と消費に関する資料から日本国内の食料需給動向の把握を行った。次にそれを踏まえて台湾, 朝鮮半島, 中国大陸という植民地や勢力圏の地域別の検討を行い、各々の地域別の食料生産に加えて、日本や他地域との貿易状況の地理的なパターン、およびその変化を描き出した。最後に、以上の作業を通じて近代日本の工業化を支えた食料供給体系を植民地経営の側面からとらえ直すことを試みた。

具体的には、初年度は国内の食料需給動向の把握に努めるとともに、台湾を主たる対象とした分析に取り組んだ。2年目には台湾の分析に加え、朝鮮半島の分析、さらには中国大陸の分析に着手した。3年目は地域別の分析を完了させるとともに研究の取りまとめを行った。

4. 研究成果

以下、個別の地域ごとの分析に関わる成果、およびそれらを踏まえた当時の内地への安価な穀物供給と植民地やアジアとの関係という包括的な枠組みの上での成果、さらに今日の食料を取り巻く状況とも共有できる国家レベルの食料供給の議論という3点から成果をしめしたい。

(1) まず個別の地域ごとの分析の成果であるが、内地の食料需給動向、台湾との食料貿易、朝鮮半島との食料貿易、中国大陸との食料貿易、その他の地域との貿易に区分できる。

内地の食料需給に関しては、「日本農業基礎統計」「食糧管理統計年報」「作物統計」などの資料から、それが明治中期以降一貫して海外からの米の輸移入によって支えられ

てきたことが明らかになった。また、これら米の海外依存先は第一次大戦以前には主に東南アジアや中国で、第一次大戦と米騒動を挟んで朝鮮と台湾という植民地からの供給体系を構築していく。1920～30年代を通じて、この供給体系は機能するが、1939年の干ばつを契機に崩壊し、東南アジアからの米輸入がそれを支える。第二次大戦の進行とともに、これら地域からの供給は途絶え、敗戦を迎える。以上が、当時の内地の需給状況の概略である。以下、個別の地域との食料貿易のパターンを示す。

台湾との食料貿易については「台湾貿易四十年表」「台湾の貿易」などの資料から、台湾から内地の労働者向けの米移出が1920年代以降に拡大していくこと、同時に日本による台湾での鉄道敷設、港湾開発が進むことなどから、欧米の文脈で指摘される第1次フードレジームと似た構造がこの時期の日本と台湾との間にも存在していたことを指摘できる。その一方で、少なからぬ日本製の食品が台湾にも移出され、台湾居住の内地人のみならず、現地の台湾人にも広く消費されていることがあわせて明らかになった。日本酒やビール、しょう油、味の素などで明確な傾向が認められた。また、一定程度的小麦や外米の輸入の存在を指摘できる。

朝鮮半島との食料貿易についても主要港湾の関税統計を中心とした分析により、台湾と同様に内地向けの米供給を担っていたことが確認できたが、それに加えて当時の朝鮮半島の食料供給も少なからず半島域外に依存していたことが明らかになった。満洲からの粟輸入や内地や台湾からの米移入、さらに小麦・小麦粉の海外依存も確認できた。

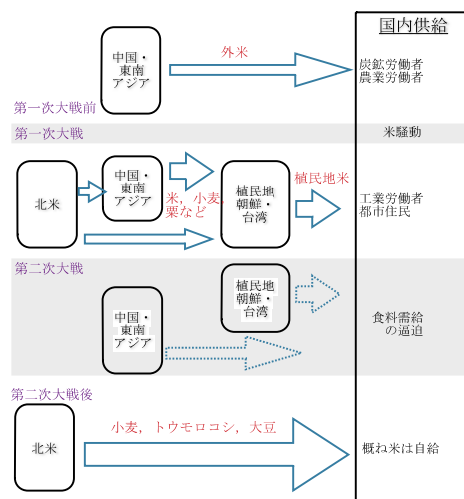
中国大陸との食料貿易に関しては、特に日本の権益が及んだ「満洲」に着目した。その結果、従来指摘されていた大豆や大豆関連商品の対日輸出のみならず、少なからぬ量の粟が朝鮮半島に向けて輸出されていたことが明らかになり、内地の米需要を支えた朝鮮半島の米生産の一端を満洲粟が支えていたことを指摘できる。

その他の地域として、上記以外に東南アジアについても付加的に分析を加えた。その結果、従来指摘されていた米だけではなく、多様な食料貿易が存在していたことがうかがえる。特に日本製食品の東南アジア市場への進出という側面に注目できる。

(2)次に包括的なレベルでの成果である。上記の個別地域の検討を踏まえて、日本の近代化を支えた工業労働者への安価な食料供給はいかにして支えられたのかという観点から検討を行った。以下、穀物の海外依存の枠組みを示した右図に沿って、整理したい。総じて近代以降の日本の穀物供給は自国内で完結することはなく、常に少なからぬ量を植民地を含めた海外に依存する不安定な状況にあった。なお、今日の食料供給もその延

長線上にあるともいえる。

まず、明治後半に輸入された外米は相対的に貧しい層の消費に充てられていたとされる(持田 1969)。その後、第一次大戦と米騒動を経て、一層の近代工業化が押し進められるとともに、日本の米供給体制はそれまでの外米依存から植民地内での自給体制の確立に向かう。1920年代から30年代にかけては植民地からの安定した米の供給体系が構築されたようにみえるが、植民地の食料は決して自給できていたわけではなかった。植民地で生産された米は商品作物として米価の高い内地に移出され、植民地の農民はそれによって現金収入を得、より安価な外米や麦・粟などを購入し、それを食用に充てていたのである。一方、内地では米価の長期的な低位安定によって農家・農村の疲弊という問題が生じたことが論じられている(大豆生田 1982;1984)。無論、安い米価が国内の決して豊かではなかった工業労働者や都市住民にも安定的な食料供給を可能にしたということもできるが、第一次大戦以前は外米が農村や炭鉱地帯での食料供給を支え、第一次大戦後は外米やその他の輸入穀物が内地向けの米生産をになう植民地農村の食料供給を支えていたのである。いずれにしても当時の日本の食料(米)供給は植民地を含めた海外に依存していたといえる。



第一次大戦・米騒動以降は植民地域内での米の自給を目指したわけであるが、(1)に見たように植民地農村の食料供給は外米や小麦などに依存しており、実質的に域内での穀物自給はできていなかったのである。こうしたいわば「見かけ上の」あるいは米のみに焦点を当てた域内自給体制はその後、わずかな期間で構造的な変貌を余儀なくされる。1930年代に入り満洲事変から日中戦争へと情勢が進むと北米やオーストラリアからの東アジア向けの小麦の輸出が縮小される。これを受けて東アジアでの食料(穀物需給)事情が逼迫し、米価は上昇し、それまで相対的に米価が高かった内地に仕向けられていた植民

地の米が内地に向かわなくなったのである。これにかわって米の供給を担ったのが東南アジアであり、仏領インドシナ、タイ、ビルマなどからの輸入がそれになった。しかし戦況の悪化とともに東南アジアからの輸入は途絶え、戦争終盤の食料難へと事態が進行する。

その後は敗戦によってそれまでの食料供給をになった植民地を失うと、米不足・食料不足は深刻化した。戦後、食料増産に努めるとともにアメリカ合衆国などからの大量の穀物輸入に支えられた食料供給体系が構築され、今日に至っている（前頁図最下段）。戦後の米は戦前以上の高い自給率を維持するが、穀物需給に占める米の割合は低下を続け、その一方で大量の海外からの穀物が日本の食料需給を支え続けてきたということが出来る。それもまた、別の形で「見かけ上の」自給かもしれない。すなわち、米のみに焦点を当てればおおむね自給できているのかもしれないが、それ以外の穀物の供給は海外に依存しているからである。

（3）最後に今日の状況とも共有できる国家レベルの食料供給の議論という観点からの成果を示したい。第一に、植民地の食料供給の一端を域外に依存した戦前の状況と今日との共通点を指摘することができる。1920～30年代に完成していたかに見える米の帝国の領域内の自給はその後短期間で破綻する。今日の米の自給率も一見高いように見えるが、穀物需給における米の位置は年々低下し、大量の穀物輸入に依存している。こうした今日の食料供給状況と戦前のそれはある意味で似通っているといえる。米については概ね自給しているように見える点、しかし、それを支えるそれ以外の穀物は海外に依存しているという点、最後にそうした点に関する問題意識が希薄であるという点においてである。特に最後の点は戦前以上に認識が薄い。今日の食料供給を米以外の大量の穀物の海外依存を抜きにして議論することはきわめて不完全であるにもかかわらず、今日の関心は低いといわざるを得ない。そこに国内の米需給を重視する余り、北米からの小麦の貿易制限の影響を正確に予測できなかった戦前との共通点を認めざるを得ない。

このようにしてみると明治期以降、今日に至るまで日本の食料・穀物供給は一貫して海外に依存している。特に戦前の米、戦後の小麦やトウモロコシが顕著であるが、穀物需給としてみた時、圧倒的に戦後の海外依存が大きいことが明白である。それによって日本の食料供給が支えられてきたのである。すなわち、戦前の日本の工業化を支えた労働者への安価な食料（米）供給の一端はアジア各地と植民地に依存しており、さらには植民地への穀物供給も帝国の域外に依存していたといえる。同様に、戦後の高度経済成長を支えた労働者への食料（米以外の穀物）供給も多く

をアメリカに代表される海外に依存し、今日の経済的繁栄も同様の食料の海外依存の上に成立しているといえる。日本の工業化（産業化）と経済的な発展は、戦前から一貫して海外からの食料供給によって支えられたのである。私たちはまずこうした認識を明確に持たなければならない。それは、戦前、戦中と同じ轍を踏まないための認識でもある。一方で、戦前の植民地経営を前提とした海外領土からの食料供給と、戦後の国際社会、特に西側諸国を中心とした政治経済的結びつきを前提とした貿易によるそれとを単純に比較できないことにも留意せねばならない。戦前と戦後の食料の海外依存に関する政治経済的状況やその中身の質的差異は大きく異なるからである。

<引用文献>

持田恵三，米穀市場の近代化-大正期を中心として-，農業総合研究 23(1)，1969，1-56
大豆生田稔，一九二〇年代における食糧政策の展開-米騒動後の増産政策と米穀法-，史学雑誌 91，1982，1552-1585

大豆生田稔，1930年代における食糧政策の展開-昭和恐慌下の農業政策に関する一考察，城西経済学会誌-10(2)，1884，37-75

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 7 件)

荒木一視，新義州税関資料からみた戦間期の朝鮮・満洲間粟貿易-日本の食料供給システムの一断面-，人文地理，査読有，68 巻，2016，印刷中

荒木一視，戦前期フィリピンの農産物・食料貿易に関する一考察，エリア山口，査読無，45 号，2016，29-43

http://www.edu.yamaguchi-u.ac.jp/~soc/GeogrHome/yamaguchi-chiri/yamaguchichiri_files/backnumbers/2016_45.pdf

荒木一視，1940年代の地理学における食料研究-いかにして食料資源を確保するのか-，地理科学，査読有，70 巻，2015，215-235

荒木一視，食料の安定供給と地理学-その海外依存の学史的検討-，E-journal GEO，9 巻，2015，239-267（2015年度日本地理学会賞（論文発信部門）受賞）

https://www.jstage.jst.go.jp/article/ejgeo/9/2/9_239/_pdf

荒木一視・林呈容，戦前期台湾における日本食の受容-工業統計表と台湾貿易四十年表に基づく推計-，エリア山口，44 号，2015，51-65

http://www.edu.yamaguchi-u.ac.jp/~soc/GeogrHome/yamaguchi-chiri/yamaguchichiri_files/backnumbers/2015_44.pdf

荒木一視，戦前期朝鮮半島の食料貿易と米自給-主要税関資料による検討-，山口大学教

教育学部研究論叢第1部, 64巻, 2015, 15-29
<http://www.lib.yamaguchi-u.ac.jp/yunoca/handle/C030064000102>

荒木一視, フードレジーム論と戦前期台湾の農産物・食料貿易-米移出に注目した第1次レジームの検討-山口大学教育学部研究論叢第1部, 63巻, 2014, 31-49
<http://www.lib.yamaguchi-u.ac.jp/yunoca/handle/C030063000104>

〔学会発表〕(計 6 件)

H. ARAKI, Exports of Japanese cooking ingredients in the prewar period. 2015,10,10 The 10th China-Japan-Korea Joint Conference on Geography and the 1st Asian Conference on Geography (East China Normal University, Shanghai, China)

荒木一視, 戦間期の朝鮮・満洲間の食料貿易 2015,9,19 日本地理学会(愛媛大学, 愛媛県松山市)

荒木一視, 戦前期台湾における日本食材の移入 2015,3,28 日本地理学会(日本大学, 東京都世田谷区)

荒木一視, 戦前期の朝鮮半島をめぐる食料貿易 2014,9,20 日本地理学会(富山大学, 富山県富山市)

H. ARAKI, Grain Imports and Food Self-Sufficiency in Japan: A Historical View. 2014.7.7 9th Korea-China-Japan Joint Conference on Geography(ARPINA, Pusan, Korea)

荒木一視, 昭和期の食料供給と経済地理学 2013,12,21 経済地理学会西南支部例会(弓削商船高等専門学校, 愛媛県上島町)

〔図書〕(計 1 件)

伊東維年編, 田中利彦, 中野元, 友澤和夫, 山本健兒, 豆本一茂, 鈴木茂, 根岸裕孝, 松永裕己, 外川健一, 鈴木洋太郎, 柳井雅人, 宮町良広, 久野国夫, 柳井雅也, 荒木一視, 鈴木康夫, 岡橋秀典, 出家健治, 鹿嶋洋, 松原宏, 米浪信男, 山川充夫著 『グローバル時代の地域研究-理論・現状分析・政策-(仮)』 日本経済評論社(印刷中)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

荒木一視 (ARAKI Hitoshi)
山口大学・教育学部・教授
研究者番号: 80254663